

育苗から田植えまでのポイント

- ①高温登熟を回避するため、**コシヒカリの田植えは5月15日を中心に行いましょう**(中山間地は除く)。
- ②健苗育成のため、**こまめな換気と適正な水管理**を行いましょう。
- ③基肥量は**適正な基肥窒素量**を守りましょう。
- ④栽植密度**70株/坪、植付本数3~4本/株、植付深さ3cm**となるように努めましょう。
- ⑤田植後3日間(活着まで)は**深水管理**、その後は**3cmの浅水管理**とし、初期分けつの発生を促しましょう。

1 適正な田植時期

- ①**コシヒカリの田植は5月15日を中心に行いましょう** (高温登熟を回避して、玄米品質の向上を図るため)。
- ②播種日は4月25日を中心とし、育苗日数は20日以内を目安としましょう。

2 適正な育苗管理

- ①ハウス内の温度が**25℃を超えないように換気**をしましょう(天気予報が晴れなら、常時換気)。
- ②乾き気味でも、夕方の灌水はなるべく避け、根の伸長を促しましょう(翌朝たっぷり灌水)。
- ③**田植え1週間前頃からは、夜間も換気し**、十分外気に慣らしましょう。

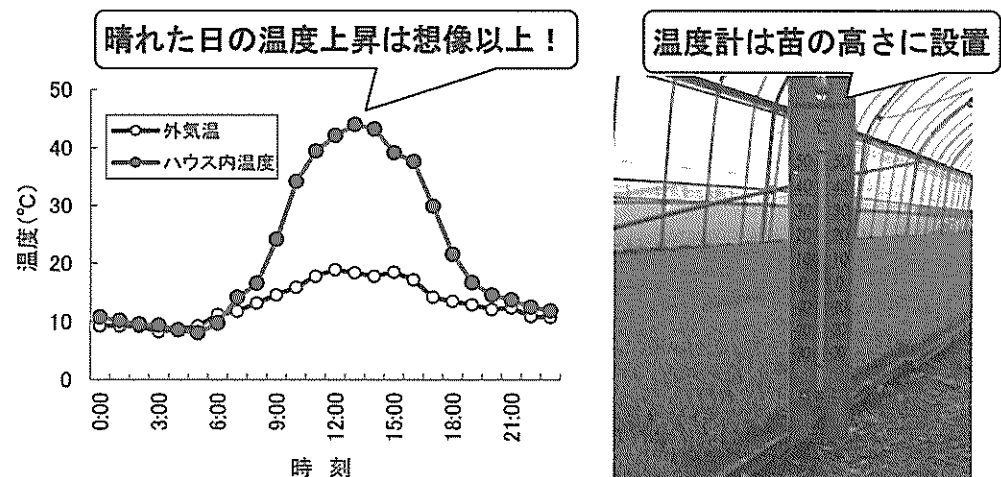


図1 晴天日の外気温とハウス内温度の推移 写真 ハウス内での温度計

3 苗箱施薬

薬剤名	使用時期	適用病害虫	使用量 (g/箱)	成分数
ルーチンブライト箱粒剤	播種時(覆土前) ~ 移植当日	いもち病、紋枯病、もみ枯細菌病、白葉枯病、内穎褐変病、イネミズゾウムシ、イネドクイムシ、フタホヒコヤガ、ニカメイチュウ、ツマグロヨコバイ、イネツムシ、ゴブノメイガ、(イネコ類:移植当日)等	50	3

※ 育苗後にハウス内で野菜等を作付けする場合、苗箱施薬剤はハウスから搬出後に施用して下さい。(こぼれた薬剤が土壌に残り、野菜に吸収されてしまいます)

4 田植えのポイント

(1)代かき作業、田植えまでの水管理

- ①代かきから田植えまでの日数は、**5日以内**とし、間隔が空きすぎないように注意しましょう。
- ②**少なめの水で代かき**を行い、稲わらや雑草をしっかりと鋤込むとともに、**ほ場の均平**に努めましょう。
- ③苗の根が露出していると薬害が出やすくなるので、**田面が固く土の戻りが悪いときは除草剤の田植同時散布を避け**ましょう。

(2)基肥量

- ①**基肥は、窒素過剰にならないよう施用量に注意**し、特に昨年、「てんたかく」において倒伏したほ場では**減肥**しましょう。  
※ コシヒカリ・てんたかく・てんこもり・新大正糯の基肥施用量は、令和3年『冬期座談会資料 P18~19』を参考にして下さい。
- ②**土壌条件や前作(大豆跡)等に応じた基肥施用量**を守りましょう。
- ③田植前には、**肥料の比重や田植機の開度設定を確認**しましょう。

◇令和3年『コシヒカリ』施肥設計例(kg)

区分	一発基肥肥料体系			側条施肥体系(基肥)	
	Jコート コシヒカリ S号	LPss コシヒカリ L号	Jコート 豆跡 コシヒカリ	LP 555-1	基肥084
砂質田	-	34~38	-	17~20	-
粘質田	26	-	-	14~17	-
大豆跡	-	-	30~35	-	10

(3)栽植株数・植付本数・植付深さ

- ①田植時に栽植株数や植付本数を必ず確認しましょう。  
※適正な穂数を確保して品質向上を図るため、**70株/坪植え**にしましょう。
- ②苗が徒長気味の場合、深植え傾向となるため、**植付深さに注意**しましょう。

**【栽植株数】 70株/坪**    **【1株当り本数】 3~4本/株**    **【植付深さ】 3cm**

春の農作業安全運動展開中!!

運動期間 令和3年4月1日~5月31日まで  
「見直そう! 農業機械作業の安全対策」

裏面に続く

## 5. 田植え後の水管理



浅水管理で初期分げつを促進!

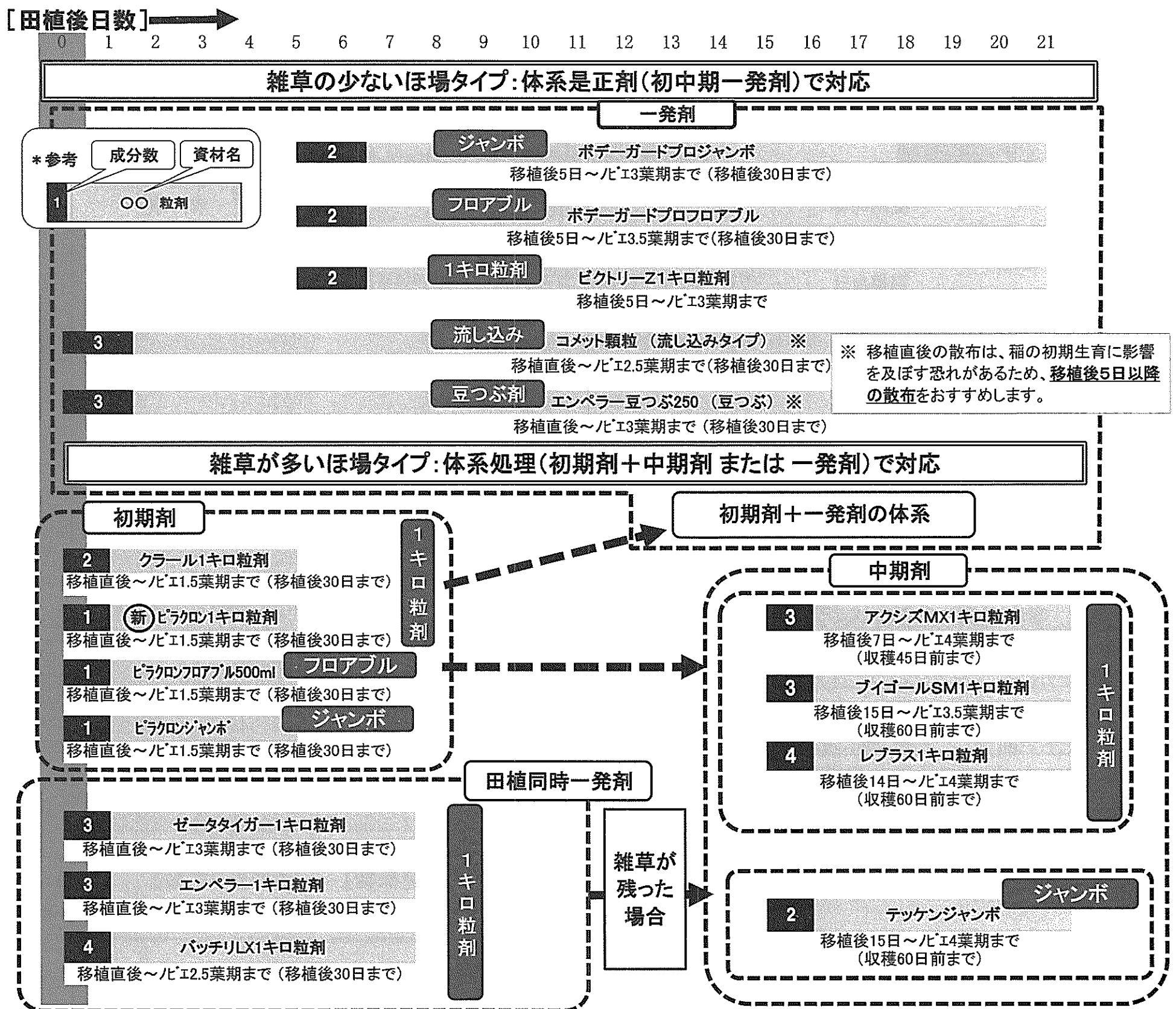
※浅水管理中でも、低温や風の強い日は深水にしましょう。  
 ※田がわくようなら、暖かい日に水を入れ替えましょう。

- ①田植え後は速やかに入水し、植え傷みを防ぐため苗が水没しない程度の**深水管理(3日間が目安)**としましょう。
- ②活着後は、**浅水管理に切り替えて初期分げつの促進**に努めましょう。

水深スケールを活用しましょう。

## 6. 除草剤散布

- ①**散布後7日間は止水状態**(「落水」や「かけ流し」をしない)を保ち、水田外への流亡を防ぎましょう。  
 ※散布後7日間に水がなくなったら、ゆっくりと差し水をしてください。
- ②フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤については5cm以上の深水状態で散布しましょう。  
 ※藻類や表層剥離が多発しているほ場での使用は避けましょう。



※(新): 新規採用の除草剤。農業注文書をよく読んでお使い下さい。

農薬は、登録内容や使用基準を遵守し、適正使用による危被害防止・環境保全に努めましょう。